
オフ会のジャンヌダルク

由一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オフ会のジャンヌダルク

【Zコード】

Z5281Z

【作者名】

由一

【あらすじ】

現世に転生したジャンヌ・ダルクは、ひきこもりを引退(?)し遂に自分のブログのオフ会に参加することになった。果たして会は上手いくのだろうか? ジルード・レイの正体は如何に? 初の複数話構成。

大須への進軍

私は、ジャンヌ＝ダルク。

かつて裏切りの炎によつて焼かれた私だつたが、数百年後の時を経て日本人「十字 まもり」に生まれ変わつてはや19年になる。

以前は人間にほぼ完全失望にしきつていて、学校も行かず、ずっと家にひきこもつていた私だつたが、1年ほど前にパソコンで始めたブログが大繁盛し、間接的ではあるが交流を持つようになつた。色々な問題も起つたが、ブログの訪問者数は増え、遂にこの度オフ会を開く事になつた。

知らない人のために説明するが、「オフ会」と言つのは、ネット上のみでの交流だつた仲間達が実際に顔を合わせ、食事会等の交流をすることである。どんな感じなのかは、私も今回が初めてなのでわからないが、オフ会が盛り上がるかどうかは今回のオフ会を主催したジル＝ド＝レイの腕にかかるつているだろう。勿論、私も会のメンバーに据えられるわけなので、ただ黙つて食事を食べ続けるだけとはいかないだろうが。

とにかく人と会つのも久しぶりな上に、まったく未知の世界だ。目的の場所、大須に向つ私は不安と期待が入り混じつていた。

鶴舞駅のあたりから続く長い坂を歩いて行く。外の景色すら久しぶりだ。太陽が眩しい。

オルレアンにいたころの太陽とは、何かが違うように見える。同じもののはずなのに、いやに弱弱しく感じる。太陽は、私がいない

間に何が困った事でもあったのだろうか？私の眠っていた間に、多くのものが目まぐるしく変わってしまった。そして、それについて説明してくれる神の声は存在しない。私は、ただそんな世の中に翻弄されるのを拒んで、籠の鳥となっていた。そんな私が今、遂に籠を飛びだし生暖かいコンクリートの地面の上に立っている。これは、正しき事なのだろうか？

使った事もほとんど無い携帯電話を覗き見ると、表示される時計は3時45分をさしていた。

開始まで十分に時間はある。私は、ゆっくりとその坂を登つて行った。

これまでの歴史（前書き）

オフ会会場へ向かうジャンヌ＝ダルク（十字 まもり）。メンバーは果たして集まっているのだろうか？

ぶらぶら大須を歩く事20分。

玉野屋は大須観音の近くのちょっとと田立たない場所にあった。 料亭の様な、なかなか古風な建物だった。かなり昔からあるのだ ろう。

信楽焼か何かの、大きな狸の置き物が私を出迎えた。

果たして、本当にここで良いのだろうか？

不安だった。本当に、ブログに来てくれる皆は来てくれるのだろうか？

もし、ジル＝ド＝レイ誰も来てくれなかつたら、私は未来永劫人間を信用するのをやめにしたい。一生、家の中でひきこもつてでも いようかと思う。

入口は手動だった。

私は、何か重苦しい、まるで決戦前夜のような感覚でガラガラと その扉を横にスライドさせる。

思わず瞑つてしまつた目を開ける。

玄関は、人気が無かつた。しかし、すぐにトタトタと足音が聞こ えてきた。

「いらっしゃいませ」

出てきたのは4～50代の女性だった。

「この店の女将さんか何がだろ？ 着物姿でちょっと威厳がある。まあ、ナポレオンが称賛したと言つかつての私の威厳程では無いと思つが。

「え・と、お名前は？」

女将さんは優しげに名前を聞く。普通なら、今の名前を言つものだろ？ が、オフ会なのでそういうのがないのだ。現世の名前を言つわけにはいかない。だから、答えは勿論こうだ。

「……ジャンヌ＝ダルクです」

言つしかなかつた。明らかに変だけど言わざるを得ない。神より賜りし神聖な名前なのだが、ここに言つと恥ずかしいのはなぜだろ？

恥じる事はない。恥じる事は無いはずなのに。おお……申し訳ありません守護天使様。このような私を見ておいでなら随分とお嘆きの事でしょう。

「ああ、ラ・ピュセルを愛する会の方ですねー、どういたしましらへ。」

私は啞然とした。

この女将さんは、私の名前にもCOSPLAYで買ったアニメチックな衣装にも動じず、爽やかに私を部屋に案内するではないか。これには、まことに驚いた。少しばかり感心してしまった。悠然と私の前を歩く様もまた、どこか優雅だ。

案内された部屋は「十五夜」という名前だった。

お座敷で、座布団と机がおおよそ30人分程の為に並べられていました。

た。そして、その机の一つに既に座つて何かメモの様なものを見ている男性がいる。

多分、彼だろう。彼に違いない。

私は、やや硬い動きでその男性に近づくと、彼はさつとその場で立ちあがつた。

ジル＝ド＝レイ（前書き）

オフ会会場に辿り着いたジャンヌ。
先に来ていた1人の男性に近づく……

ジル＝ド＝レイ

「「」んにちは！ あなたは、もしや……」

「えつと、ああ……私が、ジャンヌ＝ダルクだ」

即座に気付くとは、さすが私も美処女或いは美少女だ。まだ転生前の威儀も残っているのなら少なからず喜ばしい。しかし、そんな気持ちは表に出す事はしない。まずは、この男の素性を知らねばならない。

「君がジル＝ド＝レイか？」

「はい。お久しゅう、ジャンヌ様。昔と変わらずお美しいですね。」

変わらない事は無いと思う。いや、容姿は前世よりも上だと思う。それはさておき、この男の容姿だが……まあ、わかり易く言うと、相方が女子ボクシングを始めた、多人数アイドルグループ大好きの、ナレーションもよくやるメガネの太ましいお笑い芸人にそつくりである。この男が本当にあのジルであるのならば、正直なところ転生に失敗したと言つていいだろう。しかし、本人の前でそんな事を言うのは失礼だから言つまい。それに、私は、顔で人を差別したりするほど器量の小さい人間では無い。平等に向き合つのが主義だ。冷静に肝心なところを確かめよう。

「まだ、君の事を信じたわけでは無い。君があのジルであるのならば、この問い合わせよ。本当にそなうなら、きっと答えられるはずだ」

「はい、仰せのままに」

彼は騎士の様なポーズをとつたが、まったく似合わない。そもそも、何故にこんなキノコみたいな髪型にしているのだろう？似合つていると思つているのか、それとも大きい顔を小さく見せるためか？オルレアンにも似たような髪型の男はいたがあれはある程度流行していたからだ……色々と頭の中で詮索してしまつが勿論聞く事は無い。今はこの言葉を発して正否を確かめるのみだ。

「では、聞いづ。ラバテラの花の香りは……？」

「我らの神鳴を神明を呼びさまし、栄華の道を切り開く」

男は、迷いなく答えた。

かつて、戦の時にほんの一部で使つていた呼応式暗号を彼は正確に答えたのだ。

「……なるほど。どうやら、嘘ではなさそつだな。ジル

「おわかりいただけたようでお心しました」

私達は手を取り合つ。

はためからみたら「スプレ美少女と、お笑い芸人が語り合つてゐる妙な光景なのだろうが、幸いまだ誰も来ていない。

「よもや、あなたが転生されているとは思いませんでした。再び会つ事が出来て光榮にござります」

「お互ひ、変わつたな。ジル」

ジルは本当に大きく変わった。まさに丸とスッポン、ヴィーナスと紫式部だ。

昔は、なかなかヒゲの似合つ男だった。今はやけに肌がツルツルテカテカしている。二ヒルな雰囲気は変わらないが、見た目と完全にミスマッチであり、動きや言動が全てショートコントのネタのように見えてしまうのが複雑である。ただ、勿論、それを笑つたりはない。そもそも、私はお笑い番組等でウケることはほとんどない芸人泣かせな人間なのだ。ちゃんとジルと分かつた以上、昔の様に接する。

「君は、どうやって転生したのだ？ もしや、鍊金術か？」

「おお、お詳しいようですね。ジャンヌ様」

「まあな。伊達にひきこもつていたわけではない」

「おお、流石は。そうです、私は鍊金術によつてこの世に転生いたしました。方法を言いますと長くなるので今は伏せておきますが……危険な賭けではありましたが、何とか成功したのですよ。ジャンヌ様は、一体どのような方法で？」

「わからぬよ。気がつけばこの体だったのだ。おそらくは、大いなる神によるものだと思うのだが……何も聞こえないのだ。あの頃聞こえた天の声が聞こえない。だから、今となつてはただ、昔聞いた神の言葉を語ることしかできんよ。」

「むへ……なるほど。やはり、そうですか。」

「なんだ？ 君は、何か知つているのか？」

「ええ、あなたとコンタクトをとったのはほんのさうもあるのですか
」

「話してくれ。一体君は、私に……」

「ああ、この話は会の後にしましょう。他の人が来ましたよ

」
そう言われて私は背を向ける。
いくつかの軋む足音が聞こえてきた。

そして、僕は始まる（前書き）

ジル＝ド＝レイが本物であると確認したジャンヌ。
ほかのメンバーも次々とやつてくる。

そして、会は始まる

会の始まる時間が近づくにつれ、少しずつこの部屋「十五夜」には人が増えて行った。

ひとまず、私はホッと胸を撫で下ろした。これだけ来てくれば十分だ。

それにしても、予想外だつたのはその面子の見た目だ。

最初、私はほとんどが20～30代の若い男性ばかりかと思つていたのだが、以外にも年齢層は広く、女の子からおじいさんまでいる。私は、人を見抜く力には自信があったのだが、ネット上の発言から、その人間の素性を的確に推理することは残念ながら出来なかつたようだ。そもそも、ジルがキノコおじさんだつた時点では全く見抜けていない。ちょっと悔しい。

みんな次々と、ジルの名簿にハンドルネーム（ネットの中での名前のこと）を言って、好きな席に座つていぐ。私は、それを正座しながらろくに挨拶もせず無言で見ていた。バレているかもしれないとは思いながらも、今はまだ1人の参加者を装つていた。

そして、はじまりの午後6時になつた時には、席のほとんどは埋まつていた。

オフ会としても十分な集まりと言えそうだ。

時間が来たと分かるや否や、ジルは部屋の隅に立つ。
いよいよ開会なのだから、皆の席には料理が置かれ、ノックには
飲み物が注がれた。

「えー、皆さま改めましてこんばんは！ 本田は「ラ・ピュセル
を愛する奴」にお集まりくださいまして誠にありがとうございました。
私が、今回のオフ会を企画させていただきましたジル＝ド＝レイで
ごす！ ジャンヌさんのブログにはいつもお世話になつております
！ 本田は司会進行を務めさせていただきますので、皆さま応援ヨ
ロシクお願いいたします！ 盛り上げて行きましょうー。」

会場から、大きな拍手が起こる。歓声も少し起こつた。
はじまりの言葉としてはまあまあといったところだね。

「では、まず最初にブログの管理人であり今回の会の中心的存在
であるジャンヌさんにご挨拶を頂き乾杯の音頭を頂きたいと思
います。」

ええつ！？

私が最初なのか？ みんなが自己紹介した後では無くて私が最初
なのか？

「わあ、お願ひします。」

「……」

私は、しぶしぶ席を立つた。
視線はみんな私の方を向く。体が震える、心臓が高鳴る、妙に緊張する。

ひきこもりが長かつたせいか、こういう状況に体も心もついて行かない感じだ。

いや、何を言つているのだ私は？

私はかつて大軍を率いたあのジャンヌダルクだぞ？

数千数万の兵の前で快活に言葉を発したのを忘れたのか？

おおよそ30人。たかが30人だぞ。何を恐れる事があるか。

大丈夫だ。大丈夫。この程度どうということはない！

私は、きつと目に入れた。

そして、ゆっくりと川の流れの如く神に頂いた麗しき口を開く。

「みなさん、お集まりいただき、ありがとうございます。私が、
「ラ・ピュセル」の管理者、ジャンヌダルクです。沢山の方が、当
ブログに来ていただいている事、まことにうれしく思っています。
おかげで最近は、人間というものに再び期待感を持つようになつて
きました。コメントも、いつも有難く拝見させていただいておりま
す。返事に拙い部分があるかもしませんが、大変感謝していると
言う事がわかつていただけると幸いです。オフ会と言うものは初め
てですが、今日はお互い、良い会にしましょう。では、大いなる神
に対して、この会を開く事が出来た事に対して……ええと、乾杯！」

「かんぱーい！」

皆、コップを天高く掲げ、次にそれを他の人のコップに当てる鳴らす。

チリンと良い音が室内にこだました。

私はそれを聞いて、かつて戦いに勝った時の祝杯を思い出し、懐かしく思った。

ドキドキ自己紹介～私はただ傍観するのみ～（前書き）

ジャンヌの、乾杯の音頭はなんとか上手く行つた。
続いてメンバーの自己紹介に移る。

ドキドキ自己紹介～私はただ傍観するのみ～

「ありがとうございました！」

乾杯が終わると再びジルが司会を続ける。

さて、それぞれの飲みっぷりだが、一気に飲んだ人もいれば、ちよつとだけ口に付けただけの消極的な人もいて様々だつた。こう言う所にも人間性は現れると思う。かく言う私は、炭酸の強いコーラを少しだけ飲んで、やめた。かつて戦いを共にした男たちは酒飲みの豪快な者が多かつたが、それは国柄と言うものもあるかもしれない。それよりもまず、アルコールを飲んでいる人がこの会場にはほとんどいない。九州ならば結構な酒豪がいると言うが、どうやらそういう人間はいなさそうだ。ここは中部地方だしな。まあ、未成年の私がこんな飲酒の事を考えているのは常識的に考えれば妙な話だと思うが、考えてしまったのだから仕様が無い。

「さて、それでは次に皆さんのお自己紹介に移りたいと思います。そちらから順に自己紹介をお願い致します！　名前は、ハンドルネームで結構です。」

ジルの手は、1人の気弱そうな男性に向けられた。

皆の視線に押されて、20代の髪の長い細身の男性は、まごまごして立ち上がる。

自己紹介って言うのが好きな人間って言うのはあんまりいないだろう、特に、自分に自信の無い人間にとつては苦痛だ。自分の事など語りたくないのに、こういった初対面の状況で語らなければならない。そこにはまるで、魔女裁判にかけられ、晒される無実の乙女に繫がる哀れみを感じてしまう。しかし、今の私はただ、彼の声に

耳を傾けるのみだ。

「あ、あの……<暗黒開闢魔王ルシファス>です……三重県から
きました。今日は、よろしくお願ひします。」

なぬ！？

彼があの、威勢のいい挑発的発言を連発するルシファスだという
のか！？

これは、驚いた。まったく、豹変とはこういう事を言つのだらう
な。いつもは長い「メントを書き込むのだが、こと実際の自己紹介
となると、言葉少なくあっさりと着席した。しかし、そのギャップ
を覚悟してここに来た勇気は認めたい。良く頑張つたと、私は拍手
を送つた。

彼が出だしだった事で安心したのだろうか？

以降の自己紹介は、割とリラックスした感じになつて行つた。そ
れにしても、みんな全然イメージと違つ。<FOX>は、腰の曲が
つたお爺さんだし、<ドクター・くわ松>は医者じゃなくてIT関
連の仕事してららしいし、<メガネざる>は視力1.5だし、<ミ
ルフィー>はムキムキのヘルクレスみたいな男だし、<Yシャツ君
お坊さんだし、<やれ男>は、いつも3枚目をやつているがヤー
ズ事務所寸前のイケメンだつた。とりあえず、そんな彼らに私は心
から拍手を送り続ける。勿論、他のメンバーも拍手を欠かさなかつ
た。

「……ありがとうございます。では、次の方。」

「はー。」

そして半分くらいが終わった時、ある女の子の参加者の番になつた。

私程では無いと思うが、なかなか可愛らしい顔をしている。栗色の髪の毛はすらりと長く綺麗だ。明らかに良い意味で浮いている。こんな子が、あのブログに来ていたのは意外だ。彼女っぽいコメントを残す人間は「ミルフィー」くらいしか思い当たらないのだが、ミルフィーは前述の通りだ。一体誰なのだろ?つ。

「こんにちわ。ええと、私は、^{ぱく}ぱくら^{ぱく}ら^{ぱく}朗です！^{さか}坂祝市からきました！みんなと会えてとっても嬉しいです。今日は楽しくオフ会したいので、よろしくお願ひしますー。」

なんとー！

彼女が、あの「ぱくら」とは。

本日一番の驚きである。私は、思わず強く拍手してしまつた。

癒し少女と和ませじこわん（前書き）

血口紹介も中盤……

ジャンヌはネットと現実のギャップに驚かされ続ける。
特に、くぱくりまく朗はカワイイ女の子だった。

癒し少女と和ませじこわん

「ぱくつまく朗」は、妙なヤツだ。

いつも私のブログに、短いコメントを多く残してきた。

大体は意味不明だ。最初に来た時のコメントは「うザーうザー」って書いてあつただけだったし、「バナナ」とか「おつ○いプリン」とか下品なものも多い。その上、急に「死ぬ」だと「死ね」だとか「首吊りたい」とか「手首切っちゃった」とかダークな発言まで混ぜ込んでくる。纖細な心を持つ人間だったら、こんなコメントを残されたら気分を害するだろう。しかし、私はジャンヌダルクだ。何事にも気丈に誠心誠意でコメントを返す主義だから、もちろん、まく朗のコメントにも全て返事をしてきた。しかし、そんな私の誠意に対しての反応は全く無く、文体も変わらずに書き込んできたので、てっきりイタズラ半分で、私のブログにちょっかいを出しているのではと私は勘織っていたのだ。だから、ここにまく朗が来たのは、実に意外だった。しかも更に、あんな困った事を言いそうもない純朴な感じの女の子と来たものだ。少なくともここにわざわざ来る以上、私に対しても何か感情的なものがあるには違いない。

結局その後も「予想外です」の連発で自己紹介は終わつた。私はネットと現実の大きな差異を知らしめるには十分な内容だった。そして、食事の時間となつたが、まだメンバーが打ち解ける様子はまだ無かつた。私も黙々と、お刺身のつまを醤油に浸けて食べる。そんな微妙なムードを打破したのは、急に席を立つて武勇伝を語りだしたハンドルネーム「FOX」の老人だ。

彼は、食べている皆の前で、笠松競馬で万馬券を当てた事やオイ

ルショックの時にスーパーのトイレで起こった事件、地元球団の低迷期の話など、長い年月で経験したどうでもいい体験を次々に話したわけだが、これが実に面白い。どうでもいい内容なのに、周りから笑い声が漏れる程にやみつきになる面白さなのだ。語り口は軽快、表情も活き活きとしている上に語彙も豊富ときていて、この老人はかの夏目先生の生まれ変わり或いは龜有からの使者ではなかろうかと私は思った。これほど周りに聞かせる事が出来る力はかつて多くの兵に神言を説いた自分ですら感心するに至る。これなら落語家の真打やら司会者やら何やらにでもなれそうなものなのだが、話の内容上じつやうじく普通の人生を送つて来たとなると、まったく才能の無駄遣いである。この武勇伝は、皆が食事を一段落するまで続いたが、これのおかげでオフ会はとても和やかになった。更にジルの後押しもあって、みんな徐々に話し始めるようになり、とても良い雰囲気になってきた。

私の近くにも、どんどんメンバーがやつてきた。

そして、皆口チップにジュースをどんどん注いでくれ、それを私はどんどん飲んだため、結果トイレに行きたくなつた。炭酸飲料も多く飲んだのでお腹も張つてちょっと苦しい。私とした事が、ちょっと不甲斐ない状態を晒してしまつたが、人間と言つものは排出する生き物なのだから仕方あるまい。

トイレに行こうと部屋を出る。

がやがやと楽しげな声が障子の隙間から漏れ聞こえた。

それを背に廊下を歩いていると、付いてくる足音がある。振り返るとそれは、くぱくつまく朗々、略してまく朗だった。

眞面目なんだかどうなんだか（前書き）

トマトに並んでいたジャムヌを、ぱくつぱく朗が追いかけてきた。

真面目なんだかどうなんだか

「あ……ジャンヌさん。」

まく朗が恥ずかしそうに何か言おうとしたので、私はトイレに行く足を止めて事情を聞く事にした。

「うん？ どうかしたのか？」

「ええと、つれションしようかなと思つて……」

乙女ヒヨウゼルにでもなれそうな清純な顔からどんな言葉が出てくると思つたら、連れションなどという小中学生くらいしか使わない破廉恥な言葉が出てきたので、私は心中で新婚さんをもてなす有名落語家ばかりに椅子を転げ落ちた。勿論、心中だけで表情は平静を保つた。しかし、こんなに恥ずかしそうにしてるくせに、連れションなんて恥ずかしいワードを口にするあたり流石はまく朗だ。普通の人間じや無い事は間違いない。

断るのもかわいそうだったので、私はしようがなく、まく朗とトイレに向つた。トイレは結局一つしかなかつたので、まく朗に先を譲ると、彼女はあつという間にトイレから出てきた。本当は、ただ付いて来たかっただけなのかもしれない。私が用事を終えた後も、彼女は外で待つていた。

「キレはよかつたですか？ ジャンヌさん」

「ああ、わざわざ待つてくれたんだな。……もしかして、何か

言いたい事でもあるのか?」

「はい。実は、ジャンヌさんにお礼が言いたくて」

「お礼?」

「はい! いつも私を気にかけてくれて、本当に、ありがとうございます! ジャンヌさんの優しい言葉お陰で、私何度も励まされたんです。あんなこと言つてくれる人つて、ジャンヌさんくらいだから……」

確かに、まく朗のコメントには返事を全部書いてきた。優しい言葉を書いた事もあるし、時には厳しい事も書いたこともある。それを彼女は、ちゃんと見てくれていたようだ。そういうた良心を垣間見る事が出来たは私にとっては嬉しい事だ。しかし、それなら何で、コメントはいつまでたつてもあんな感じなのだろう?」

「だから私、会つてみようと思つたんです。ジャンヌさんがどういう人なのか見てみたかったです。ちょっと不安だつたけど……でも、来て良かつた。ジャンヌさんが私の期待通りの人だつたし、オフ会も良い感じになつてきましたから」

「私もだよ……まく朗。皆にこうして会えた事は實に有意義な事だと思う。後の時間も盛り上がるといいな」

「あの、ジャンヌさん? まく朗つて何か変だし、私の本名言つちやつても良いですか?」

「ダメだ。皆も黙つてゐんだからまく朗で我慢しろ。後腐れするぞ」

「そういう場で素性を語るのは危険行為である。守るものは守らせるのが賢明だろう。こんなカワイイ子や、私みたいな美少女は、追っかけやストーキングされやすいと言つリスクが常に付きまとつているのだ。

「じゃあ、リリちゃんのところの邪魔になるし、戻りつかへ」

「はい……あの、一つだけいいですか？」

「ああ、いいよ」

「あのこれからも仲良くなさいね！」

私はそれに頷いて、すぐに廊下を歩きだした。

友達。そんなものは、この体に生まれ変わって今まで一人もいなかつた事を思い出す。身勝手で残酷な子供たちに、私の心はついていけなかつた。向こうも、私の異様さに敏感だつた。このオフ会のメンバーはどうなのだろう？　まく朗と言い、ジルと言い、私に近く彼らは何なのだろう？　信じる事が出来る人間たちなのだろうか？　裏切らない人間なのだろうか？

いや、今はまだそんな事に焦つて頭を悩ませる必要は無い。今はこのオフ会を楽しめれば、それでいいのだ。

アカペラ大合唱（前書き）

まく朗の変人ぶりを見せ付けられつつ、会場に戻るジャンヌ。
会場は賑やいでいた。

アカペラ大合唱

会場の「十五夜」に再び戻つてくると、入口から歌声が洩れ聞こえてきた。

どうやら、ジルの話だとFOX老人が急に「お座敷小唄」を歌い出したのを皮切りに、アカペラカラオケ大会みたいなのが始まつたらしい。私が部屋に入つた時には頭に派手なバンダナをしたくまがつぱ君>が、最近流行りのアニメ「トライアウト零時んぐ」の主題歌「さつぱり 学生服」を歌つていた。

それから、次々にメンバーが歌い出す。年齢層が広いため知つてゐる曲もあつたが知らないもの曲もあつてなかなか面白い。ヘタクソな人もいたが、みんな熱唱していたので聞き苦しい感じはしなかつた。

あの暗黒開闢魔王ルシファースも、細身からは想像できないビジュアル系ボイスで皆を驚かせた。

巻き起こる拍手と声援。生まれる謎の一体感。こついうのは、悪くない。

ただ、私は歌わない。音痴で恥ずかしいと言うわけではないのだが、会のメインはどつしりと腰を下ろすのが良いだろう。かつては、聖歌を唄い、率先して兵たちを鼓舞したこともあつたが、あの時と今は状況が違うのだ。物静かな美少女を気取るとしよう。

暫くすると、隣になつて座つていたぱくりまく朗が、私の服を引っ張つた。

私がどうしたのかと聞くと、まく朗は恥ずかしそうにこつ言つた。

「ジャンヌさん……私も、歌つていいでしょうか?」

「ん? それは別に、いらっしゃるに聞かなくともいいだろ。歌いたければ自由にすればいいや。」

「本当に?」

私は頷いた。まく朗の歌声がどんなものかはひとつと興味深いからだ。

私の了承を得ると、まく朗はにっこりと可憐らしく笑つた。

「わかりました、じゃあ頑張つて歌いますね! たんたんたぬきの替え歌!」

……えつ?

私は、脳裏にとても嫌な予感がよぎったので、とつとつと立とうとするまく朗のスカートを引っ張つた。

「ふわっ? ど、どうしたんですかジャンヌさん?」

「まく朗、ちょっと、小さい声で歌つてみてくれないか?」

「うん? いいですよ。えーと、たんたーんたぬきのやーーんたーんぐつ?」

それより後は歌わせまいと、私は彼女の口を覆つた。やはり、この者は危険すぎる。

「悪い、まく朗。他の歌にしてくれ。」

「……はい。」彼女は残念そうな顔をした。

「うんと、じゃあ、金太の大冒険でどうでしょうか？」

「それも、ダメ」

懲りないヤツだ。

何でか知はらないが、どうやら、まく朗は下ネタで売ろうとしているらしい。口を前面に押し出すイケメン俳優もいるが、それとこれは話は別だ。とにかく、野放しにはできない。このジャンヌ・ダルクの面前でそのような破廉恥な言葉を口にするのは言語道断なのだ！ 全年齢層向けの小説で性的な表現をする事と同じく、の禁忌である。あつてはならない。

結局、まく朗には「おつし座 78」を歌わせる」という事を収めた。

まく朗の歌声は、全部裏返つてコノコノレだったので、私はくすりと笑つてしまつた。

たぬきの歌を歌わせなくて本当に良かつた。

ピント大会（上）（前書き）

会も終盤に差し掛かる。
ジルが取り出したのは……

ビンゴ大会（上）

歌も一段落したところで、ジルがまた立ちあがつた。

「えー、盛り上がりでありますところをすいません。これから、このオフ会の一大イベント「ビンゴ大会」を始めよつと思ひますー。」

そう言つと、女将さんが待つてましたと現れて、古臭い抽選マシンを持つてきた。

皆がそれに、おおと声を上げて拍手をする。ジルは、そんな彼らに一枚ずつビンゴ用紙を渡して行つた。勿論、私も貰つた。

「今日は、このジル＝ド＝レイが皆さまの為に沢山の賞品を用意いたしました！ 是非ともビンゴしてくださいね！ 最初にビンゴした方にはなかなか素晴らしい物をプレゼントしますよ」

ジルも偉く奮発したものだ。

長らく会つていなかつたのにここまでしてくれるのは良い人間だ、深く感謝せねばならない。やはり、人は見た目で判断してはいけないと実感する。

「ジャンヌさん。一等賞の商品つて何でしょ？」「

「何だらう？ 楽しみだな。まく朗は、何だと思つ？」

「えーと、くおしり型ヘルメットだつたらいいなー」

まく朗に聞いた私が愚かだつた。

確かに、それは聞いたことのあるがそういうものは「罰ゲーム」

とかで貰える品だ。

「では！」ジルが手を上げる。
「抽選スタート！」

ボタンを押すと電子音で「おら死んじまつただ」が流れ、電光掲示板の数字がチカチカ動いた。皆はそれをじっと見つめる。私も、景品が気になるので表示される数字は気になった。

「はい……36！」

会場で「よつしゃ！」とか「やつた！」声が上がる。

まだ始まつたばかりなのにハイテンションだ。こう言つタイプの人間つて何となく、途中でぱつたりと運の流れが止まつてしまつ気がするには氣のせいだらうか。

次々と数字が発表される。

しかし、私はまだ1つもビンゴ用紙に穴が開いていなかつた。前世は運命に愛されたことがあつた私も随分と見放されたものである。

18 18
27 27
45 45
8 8

「リーチ！」

そして、そんな私を尻目に早くもリーチしたものが現れた。それは、カクガリの男 ^{m a d a r a} だった。

「おお、遂にリーチが出ましたね！ でも、まだです！ 鹿さん頑張つてください！」

ジルはそう言つが、頑張れるとこひが一つも無い。全部運だ。ただ、やつと一つ二つとの間に穴が開いた。まだ追いつける可能性はある。

隣のまく朗を覗きこむと、彼女は既に4つ穴が開いていた。びつやう運は良い方らしい。

手に汗握る展開は暫く続いた。ビンゴは、なかなか出ない。しかし、その争いも23の数字が出た時、遂に節目を迎えた。

bingo大会（中）（前書き）

白熱するbingo大会……
最初のbingoあるのは誰？

ビンゴ大会（中）

「ビンゴォ！」

会場がどよめく。

遂に一番乗りが現れた。

「おおー、出ましたっ！ 最初にビンゴしたのはクワムラさんです！」

クワムラは、中年の女性だ。

チーターの絵が描かれた服を着ていて、大阪にでもいそうな感じの人だ。ただ、さつき通りがかつた感じだと大須も結構そういうおばちゃん向けの服の店が多いから地元っぽい人とも言えるかもしれない。とにかく、そのおばさんがビンゴして立ちあがった。

「おめでとうございます！ 栄えある一等賞の景品は、ハワイ旅行です！」

え？

今、何て言った？
ハ・ワ・イ旅行あおあお！？

これには私も驚きを隠せない。こんな小さなオフ会の中の小さなゲームの景品が事もあらうにクイズ番組で難問に次ぐ難問に正解した挙句にしかもらえない、あのハワイ旅行だとは。女将さんが封筒みたいなものを持ってきたが、あの中に入つてるとは、全く信じられない話だ。嘘だったら承知しないぞと思つたが、クワムラおばさんがすぐに中を見てくれたので、それがどうやら本物らしいとわかつた。皆がひとつ驚く中、ゲームは続く。

「ビンゴー」

2等賞は、小柄な青年く聖騎士ランスロートだつた。

商品は……S V B ! スババチャルボイ これまた最新型の家庭用ゲーム機ではないか。私は、世の中には興味を無くしていたが、物欲は失つていない。欲しかつた。正直、ハワイ旅行よりこつちが欲しかつた。貰えたら「テスガイア4」買つてしまらゲーム三昧だつただろうに。実にくやしい限りだ。それにしても、今回のオフ会の会費つて確か2000円だつたよな？ 私は免除されてるし、食事代だけでも足が出來な氣がするが、もしかしてジルが全部自腹を切つているのだろうか？ だとしたら、奴はとんでもない金持ちなのかもしれない。

3着あたりからは、やつと普通の景品になつてきた。それでも、ミニ掃除機とか、鉛筆削りとかまずまずだ。しかし、さつきから女将さんが賞品を持ってきているが、タイミングが絶妙すぎる。ずっとどこかで、ビンゴするのを見ているのかと思う程に、ジルが景品名を言つたあとにすぐさま部屋に入つてくる。恐るべし……やはりこの女将、戦場でも活躍できるに違ひない。

さて、私だが、やつとリーチまでこなしきつけた。

隣のまく朗はWリーチなのに一向にジンゴしないのが可哀そうだ。

「ジヤンヌさん… お互にビンゴ出来るといいですね！」

「そうだな、まく朗。あまりいい賞品は望めないけれど、何かは貰つて帰りたいな」

賞品も、ジルの三つといいだと、あと三つを残すのみらしい。いよいよゲームも終わりに近づいたということだ。まく朗にはあ言つたが、正直もう景品にはあまり期待していない。十分楽しんだし貰えなくても良いかなと三つのが本音だった。

「では……次の番号は……10です！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5281z/>

オフ会のジャンヌダルク

2011年12月26日20時56分発行